

殺虎口から遙か数百里、喬家の「在中堂」では、深夜になってもジリジリと蠟燭が灯っている。喬家の当主の妻である曹氏は、すでに随分と長いこと呆然とその場に座っていた。そばで小間使いの杏児が懸命に眠気を堪え、口を手で覆って幾度もあくびをかみ殺していたが、ついに口を出した。

「大奥様、そんなにご心配なさらなくても……曹番頭さんが仰るには、どの品もみんな真夜中

に取りに参りますし、口の堅い人に頼んで遠くで質入れしてもらうから、噂が漏れる氣遣いなんかこれっぽっちもないんだそうですよ」

曹氏はゆるゆるとかぶりを振っただけで、やはり何も言わなかった。年の頃なら三十前の大層美しい女だったが、いつも柳眉をひそめているために眉間にうっすらと皺が刻まれており、いかにもはかなげな体つきをしていた。杏児はつぶらな瞳をぐるぐると動かすと、しばらくためらった末、再び口を開いた。

「ひよっとしてあの玉石の屏風のことでお心を傷めておいででは？　そもそもあれは奥様がお

興入れの時のお道具……」

曹氏は手をふって杏児の言葉を遮った。

「このところ大旦那様にはお医者だお薬だと掛かりが多かったし、若旦那様は明日、太原府に郷試（科擧の一次試験。各省ごとに行われる地方選抜試験）を受けに行かれるのだよ。万一合格したら、体裁を整えるためにもお金がかかる。質入れしなさい！　ともかく一万両にはなるだろうからね」

言いしれぬ苦渋がにじみ出る声に、杏児はそれ以上何も言えなくなってしまった。曹氏が手を振って下がれと合図するので、杏児はちよつとためらって小腰を屈めた。

「大奥様も早くお休みなさいまし。明日は若旦那様をお見送りしなければなりませんし」

曹氏がただ手を振るばかりなので、杏児はもはや何も言えずそつと下がった。

曹氏は片手で頬杖をついて長いことひとりで座っていたが、突然立ち上がると先祖の位牌の前に跪き、小声で祈禱を唱えた。

「喬家代々のご先祖様、喬門曹氏、本日これにて天にましますご先祖様の靈に、心よりお祈り申し上げます。われら喬家の包頭の商いがつつがなく運びますよう、大旦那様がこの災厄を乗り切ることが出来ますよう、お守りくださいませ。大旦那様のお命は、ひとえにこれに持ちこたえられるかどうかにかかっているのですごいます」

唱え終わると少し心が安らいだが、立ち上がった途端、さきほど玉石の屏風を取りに来た時曹番頭が口にした言葉が耳元に蘇ってきた。

「大旦那様、大旦那様はほんとうにわれわれに勝ち目があるとお考えなのでしょうか？」

「邱家の思う壺ということになりはしませんまいか？」

曹氏は脚から力が抜け、再び跪くと思わず手を合わせた。

「いいえ、いいえ……われわれ喬家は、お爺様の貴発公が商売を始めて以来百年、一度たりとも天理に背くような非道な真似はしていない。かりに今回は達盛昌の邱家に包頭での高梁商いの地盤を奪われ、大旦那様が万事休したとしても、わたしたちが負けねばならない道理はない。ご先祖様方、喬家ごもし負けるようなら、もはや天理はないものと……」

唱え終えても、曹氏は長いこと跪いたまま身体を起こそうとしなかった。

百年の歴史を持つ喬家の大邸宅を、夜が重苦しく取り巻いていた。しかし続き屋の二階にある倉庫の古い家具の間には、明るく蠟燭が灯されていた。壊れて不要になった家具や以前商売で使っていた古い勘定台などが積み上げられ、古いそろばんや『商賈便覧』『弁銀譜』『客商一覽醒迷』などといった書籍が乱雑に放り出され埃をかぶっている。日頃はめつたに訪れる人もない場所だ。

古い木箱の上に横たわり致庸はぐっすりと眠りこんでいた。開いたままの『莊子』が腹の上に伏せてある。深い眠りの中で唇の端が時折ピクリと動く。が、だしぬけに大声を上げて飛び起き、大きく目を開いてひとりごちた。

「あ！ ちがった、学びて優なれば則ち商う」じやなくて、学びて優なれば則ち仕う「だ！」致庸は中肉中背の平凡な容姿の若者だった。ほめたところでせいぜい色白ですっきりした顔とでも言うのが関の山だ。しかし不思議なことに、その一対の大きくもない瞳は、めつたにないほど黒々と輝いており、容貌を際立たせていた。ひとりごとをつぶやく致庸の双眸は暗闇の中で星のようにきらめいた。しばらくすると完全に目が醒めたらしく、頭を抱えて苦笑する。「まずいな。どうしてこんな夢を見たのかな？ 学びて優なれば則ち商う」だなんて、孔子様がそんなことおっしゃるわけがないのに！ ……いかにいかに、最初から夢を見なおさなきゃな。学びて優なれば則ち仕う」だよ。孔子様がまた言い間違った！」

目を見開いて一時座っていたが、致庸はまたさきほどのようにどすんと寝そべった。ややあつて再びガバツと起き直ると微笑んでひとりごちた。

「ちがう！ わたしが見たいのはそもそもそんな夢じゃないんだ！ わたしが見たいのは莊子が胡蝶に化した夢だ」

致庸は裏声で晋劇の役者の節回しを使って台詞を唱えた。

「春の光麗しき日、清風なごやかに暖かく、莊周なすことなく後園に入りて、百花の咲き誇り、鮮やかな蝶の舞い飛ぶを見る。覚えず心中大いに喜び、ふと眠りに落ちるに夢一つあり。莊周夢に胡蝶となる。左をかえりみ右を眺むるに、五彩の翅膀、小さき巧玲たる身軀、翅を振るつ

て翔ぶは、栩栩然たる胡蝶なり。ただこの胡蝶の花亭柳樹の間を穿ち、秋水長天の下を徘徊するを見るに、覚えず大いに快樂とす。にわかには覚むれば、胡蝶は自らが莊周に戻りしを悟る、莊周これを悦ばず。かれを、否、天下の莊周の徒の頭を悩ますに、一体これはいかなることかと？ われはそもそも莊周なるか、あるいは自由自在に花叢を飛び交い適適全と自らそれを楽しむ胡蝶なるか、あるいはまた自由自在なる胡蝶がそもそもすなわちわれ莊周か？ ……ならぬならぬ、われ心地よく楽しく一匹の胡蝶なり、なぜに莊周などでありえよう……」

致庸はいい加減に台詞を唱えながら、若々しい顔いっぱい何の憂いもない快活な笑みを浮かべ、フツと息を吹きかけて蠟燭を消すと再び深い眠りに落ちた。

そしてついに、運命の金色の蝶が致庸の夢に現れた。ひらひらと飛び回りきらきらと輝いて、百頭、千頭、千万頭の蝶が夢の世界を飛び回った。